

# 「ありのまま Amagasaki」

## セクシュアルマイノリティと人権について考えよう!

今回は、セクシュアルマイノリティの当事者の人にも、周りの皆さんにも知ってほしいお話です。  
 昨年、尼同教の推進大会で弁護士の仲岡しゅんさんに LGBT についてご講演をいただきましたので、すでにご存知の方もたくさんいらっしゃると思いますが、LGBT とはセクシュアルマイノリティの中でも代表的な、レズビアン (L)、ゲイ (G)、バイセクシュアル (B)、トランスジェンダー (T) の頭文字をとった言葉です。

Lesbian	Gay	Bisexual	Transgender
レズビアン	ゲイ	バイセクシュアル	トランスジェンダー
身体の性と心の性が女性で女性が恋愛対象になる人	身体の性と心の性が男性で男性が恋愛対象になる人	男性女性どちらも恋愛対象になる人	生まれ持った身体の性とは違う性で生きている人 生きようとしている人 生きたいと思っている人

他にも DSDs (体の性の発達が先天的に非定形的な状態 (特定の性に属さない状態) X (男女どちらでもない性別として生きる人) などを総称してセクシュアルマイノリティと呼びます。

性とは男性か女性かという簡単に分けられるものではなく、さまざまな立場があるので「たくさん色」という意味で虹の色に例えてレインボーカラーで表されます。

これらは生まれ持ったものなので、趣味や好みではありません。日本では 1995 年に初めて「性同一性障害」という医学的疾患名が使われました。

### 心を生きると書いて「性」

多くの方は生まれた時の性に抵抗感や違和感をもつことなく暮らしていますが、トランスジェンダーの人たちは生まれた時の身体の性と、自分が感じる自分自身の在り方の性が一致しません。

LGBT の人は人口の3~5%いるといわれ、自分の身体の性に違和感を持ちつつも、心の性のまま生きられなかったり、誰にも言えずに一人で悩んでいる子どもたちが、30~40 人のクラスに1人はいると考えられます。

そのような子どもたちが、どのようなことに不都合を感じ、また、どのようなことに苦しんでいるのかを広く知ってほしいという想いで、トランスジェンダーであることをカミングアウトし、尼崎市内の小学校に勤務するかわら、セクシュアルマイノリティの問題を人権問題として講演等の活動をしていらっしゃる M さんにお話を伺いました。



笑顔が素敵な A・M さん



Q これまでに様々な地域の学校で「LGBT」の講演会をされていますが、どのような想いでお話されているのでしょうか。  
 A 今、セクシュアルマイノリティの子どもがクラスに1人はいると言われていきますよね。「そのような子どもたちがいることを知ってもらいたい」「私と同じ立場の子どもが、少しでも自信をもって生きられるようになればいいな」という想いでお話しました。どの子どももみんな同じように尊重されるべきだし、教師という立場でメッセージを発信していければと思っています。そのことが、子どもの人権を守ることににつながるのではないかと思います。

Q Mさんご自身、初めて心と体の「性」に違和感をもたれたのはいつですか？  
 A 幼少時です。姉はスカートやかわいい服を着られていいなと思っていました。姉が習っていた「バレエ」をしたかったのですが、厳格だった父は「男は男らしいものを習え」と言って、私は「剣道」を習わされました。小学生になる時に姉と同じ赤のランドセルを買ってもらえると思っていたら、黒だったので違和感を覚えつつ「男の子だからそんなものなんだろうな」と自分に言い聞かせていました。  
 Q ご自身の気持ちを偽った生活を続けていた時期は、どのような感じでしたか？  
 A 決して偽っていたわけではありません。子どもの頃から、自分は男性なのだから男性として生きなければいけないと言いつつ、敢えて男らしくふるまっていました。同時に内面にある女性的な側面を遮断できない自分を受け入れられず、言葉では言い表せないもやもやしたものをかかえたまま生活していた気がします。1995年に性同一性障害という診断名を知って以来、ようやく自分の存在を自分で受け入れられるようになりました。

Q 性適合手術は受けられたのですか？  
 A かねてから受診している大阪の専門の医師の紹介で、タイの先進的な医療機関で施術しました。  
 Q 健康に影響がでるケースが少なくないと聞きましたが…？  
 A 手術の前からホルモン投与を受けていますが、疾病のリスクが高まるといわれていますので、医師の指示のもと、血液検査と並行して投与しています。

## どの子ども自分らしく生きてほしい

### 尼崎市立立花西小学校 教諭 A・M さん

＜インタビュー＞ 尼同教だより編集委員 坂本 和也 さん

Q 身体的・心理的なストレスを抱えながらの生活だと思いますが、仕事で困ることはありますか？  
 A 社会的に LGBT を受け入れる風潮が広がり、また身の周りに理解してくださる人が増えてくることでカミングアウトすることができました。普通に「M 先生」として接してくれるのが不安でしたが、理解していただけているので、安心して仕事ができている。

Q セクシュアルマイノリティの子どもの人権をどのように守ればいいでしょうか？  
 A 性に限らず、マイノリティの子どもは仲間はずれやからかい、場合によってはいじめの対象になったり、不登校になりやすかったりすることもありますので、学校ではどの子どもも分け隔てなく、安心して学校生活を送れる環境づくりをしていくことが大切です。まず第一は担任をはじめ、身近な立場の者が相談できる存在であることです。スクールカウンセラーと併せて、本人の自尊感情や自己肯定感を育むことに取り組んだりしていければと思います。図書室に LGBT に関する本をおいて情報を広めるのも方法です。

Q 最後に一言お願いします。  
 A 当事者は自分のことを知ってほしいと思ったり、隠したいと思ったり様々です。大切なことは当事者が周りにいてもいなくても、またわからなくても、どんなセクシュアリティをも受け入れる環境を整え、そこに携わる人の意識を高めることだと思います。そして LGBT のことを、興味本位で言いふらしたり、からかいの言葉を使ったりするのはやめてください。心ない言動がセクシュアルマイノリティの人たちを追いつめることもあります。誰もが自分らしく生きることを認め合える「Amagasaki」を目指して、活動していけたらと思います。

「ホモ」「おかま」「おなべ」などは、人によっては著しく心を傷つける言葉です。